

2013 年度すぎなみ大人塾 後期

第 8 回 講座タイトル「ツナガルシクミ」を考える

平成 26 年 2 月 22 日（土） 10:00～12:00

会場：セシオン杉並 於：視聴覚室

学習支援者：日沼禎子（女子美術大学芸術学部准教授）

坂田太郎（アサヒ・アートスクエア ディレクター）

学習支援者：坂田

みなさん、おはようございます。残すところあと 2 回。全 9 回のこの講座をどのようにまとめていくのか、日沼さんと話してきました。それで最後の 2 日間は、参加されたみなさんの、それぞれの「ツナガリ」を掘り下げていきたい。なにをやるのかというと、アサヒ・アート・フェスティバル 2014 の応募書式を道案内にしながら、企画というかたちに一度まとめてみたいのです。自分の身の回りのことや、講座のことをふまえつつ、あまり堅く考えずに、応募書類の記入欄にそって、うめていくという方向で進めます。まずはこれまでの講座をふりかえりましょう。その後、みなさんの感想を聞かせて下さい。講座で気になったこと、興味になったこと、「ツナガルシクミ」として今考えていることなどがあれば聞かせてください。

今回の講座「ツナガルシクミ」で重視したのは、どこかに既にアートがあるわけではなくて、身の回りの中にアートを探していくという視点です。第一回。遠い昔のようにも感じますが、三角インタビューをしました。自己紹介ではなくて、お互いに聞きあって、関係のなかで知り合っていく。その後第二回では、日沼さんに、以前の職場で企画された展覧会「ツナガルシクミ」をご紹介いただきました。美術展という枠組みの中で、アーティストがどのように発想し、作品を作っているのか。お客さんからどんな感想が届いたのか。そしてどんな「ツナガリ」があったのか。日沼さんのレクチャーの後には、感想をみなさん同士で話し合っていました。

第三回では「捨てるものから始まるツナガルシクミ」を考えましたね。自宅から今日捨てるものを持ってきて、まずは眺めてみる。どう手に入れたのか、どんな課程で手には入れたのか、そのものが手元に届くまでの来歴を想像し、その上で、「本のようなもの」を作りました。最後発表もしてもらいました。単に工作をするのではなく、今ここにあるものの「ツナガリ」を掘り下げる。その。「ツナガリ」から形が生まれて来る。発表していただいたどの作品にも必然性やストーリーがありました。

第四回。展覧会「ツナガルシクミ」にも参加された美術家の小山田徹さんにお越しいただきました。「獲得する共有空間」のお話。場所のプロデュースというような発想ではなく、小山田さん生き方そのものといいますか、様々な人との関わりの中で生きてきて、その中でやむにやまれず、誰かと時間を共有するための場が必要になって来る。誰かのためだけではなく、自分も含めたローカリティーのために、場づくりを行っていく。そんな自分の「ツナガリ」に目を向け、必然性のある場づくりのお話を聞けたと思います。レクチャーの後は、この周辺で、共有空間の素材になりそうな場所などのアイデアを、皆で出しました。例えば、「踊り場」に可能性を感じる、なんて意見もありましたね。共有空間という別の視点で改めて周囲を見回してみると、見えそうなものが様々にみえてきました。

第五回、六回は、美術家・映画監督の藤井光さんを迎えて、映像ワークショップ「remoscope」に取り組みました。ビデオカメラを携えて町に飛び出し、撮影したものを皆で観る。お互いの視点を交換しながら、個人の表現をみんなで愛でる。共有することで、場が生まれる。映画が表現のツールだけではなく、映像を介して場が生まれ、そこに参加された皆さんの個性のようなものが表出されて、「ツナガリ」ができていくのは、非常に興味深い体験でした。また、「1分間の固定カメラ」というルールは、普段とは違う視点で風景を眺める時間になったのではないのでしょうか。

映像を撮ることだけに限らず、目の前にある日常をどのように違う視点で見るとか。とても重要なことだと思います。そのために、スローダウンする、立ち止まってみる。じっくりと探してみる。カメラを介して眺めてみる。撮影したものを見直してみる。特別な技術が必要なのではなく、スピードや視点をかえることで、世界との別の「ツナガリ」方をつくることのできる。そういったことを感じた2日間でした。もしかしたら、アーティストの技術、アートというのは、こうした別の視点からみる、ということころにもあるのかなど、思われました。

そして今回のワークショップでは撮影した映像を、即興的に編集して一本の映像にまとめました。参加者一人ずつが、他人が撮影した映像をもって、映像の並び順を決めていきました。映像の「ツナガリ」を考え、並べていくとストーリーがあとから生まれてきました。みんなで話しながら、合意をつくりながら、映像をつくっていく。合意形成のエクササイズでもありました。実験的な試みではありましたが。

今回、小山田さんと藤井さん、二人のアーティストにご参加いただきましたが、アートって何なんだろうと考えられた方も多いと思います。僕自身もいつも考

えます。今回は、美術館の中に展示された作品を鑑賞することではなく、こうした日常のなかでのアーティストの実践を体験されたわけですね。全国各地の地域にアーティストが関わるような、アートプロジェクトと呼ばれる活動も様々に展開されています。そこではアーティストは何を求められ、期待されているのでしょうか。おそらく、経済的な意味での地域活性化の特効薬としてというよりも、問題を発見していくとか、凝り固まった視点をほぐしていく、人と人の関係が硬直したところを柔らかくしていく。解決策というよりは、可能性をつくっていく存在として、みられているように思います。ざっと振り返ってみました。みなさんの感想も聞かせていただけますでしょうか。

参加者

かなりあつと言う間だなと思いました。改めて感じたことはアートには普段から接していましたが、身近なことから生まれること。美術アートは上のものと感じていたが、自分たちと平らな視点でみるのも大切と思いました。映像がつながったときに、みんなバラバラに撮ってきたものが、ああいうふうにつながるのには感動しました。

参加者

アートって次元が高いイメージがあったが、もっと身近なことでもアートを感じられるとわかりました。アートは道具にすぎないんじゃないか。それを使って、つながりなどができていく。アートを通して、広がっていく感じがして、なるほどと感心しました。あと、楽しんでいくことも大事だなと思いました。最初にかまえていましたが、こういう視点があるのだと発見があり、視点を変えればこういう見方もできるんだと楽しい講座でした。

参加者

アートに対しては自分の好き、嫌いで判断していました。自分の周りでのアートのことを、相手に伝える方法がわからなかった。今回の講座では、そんな伝えられない気持ちを整理して、伝える方法を映像、言葉、作品で表現していききました。伝えわるのがわかって楽しかったです。

参加者

楽しかったです。自分の暮らしの中にアートがあるという視点がわかったのは

よかったと想います。

参加者

いろいろやっていたのを忘れてしまっていた。やったときは刺激があったのですが。小山田さんの「ややこしい方が楽しい」という考え方に刺激を受けました。そう思ったのに、日常で忘れて消えてしまう。ときどき振り返って、ときどき刺激を与えたいなと想いました。

参加者

募集チラシを見ると、まちなかアートと書いてあって、町にいっぱいオブジェがある写真でしたね。オブジェつくるのかなと想像していましたが、実際にはいろんなアートのやり方や、多様な体験がありました。アートは辞書では、美術以外に人文科学とあります。ルネッサンスの時も、生活のための科学でもありました。そういう提案もアートなんだ。先生たちの表現の提案があって、それは人文科学なんだと思いました。

参加者

つながるしくみということで、抽象的なことを具体化する考えを学びました、アプローチは人それぞれで面白かったです。難しい作業でしたが、楽しかったです。みなさんの視点が毎回刺激的でした。

参加者

とてもおもしろかったです。発展というのは形を変えて成長していく。つながっていたこと、つながっていることを発見したのがアートなんだなと気づきました。アートの自由さも感じ、年をとると自分で制限をつけているように思えます。それをとるとおもしろいってことをアートから教えられた。面白おかしくってという視点があると、いろんな解決策があるのではと思います。



参加者

自分で違うことをしてみたいと思っていたので、背中を押されました。予想できない状況をつくれないう自分の状況にも気づきました。ワークショップの中で、他の人からバターナイフで帯を直すという視点を聞いたときに、ハッとしました。反対の発想に驚いたのです。

参加者

はじめは、町の中のオブジェを見回っていくのかと思っていました。アートの広がり、アートの概念を驚きを持って知りました。アートってなんでも対応できるようなも思えます。小山田さんが言うように、多様な人とコラボをすることも、地域でコミュニティの活性化でも誰かが核となってやるのもあるんだなと思います。映像をとったときに、他人の解釈で意味ができていき、無加工、無編集で良いものになっていくことにアートの可能性を感じました。

杉並区社会教育センター：スタッフ1

講座を担当させていただいて感謝しております。アートって、だまし絵の要素があるのでは。違う視点がわかって、わくわくドキドキがあるように思えます。捨てるものから新しい見え方、他人の映像から他人の視点を知ったりと、そう

というのが、講座の中で出来ていました。ドキドキを人にどう伝え、どうつながっていくのが楽しみです。

杉並区社会教育センター：スタッフ2

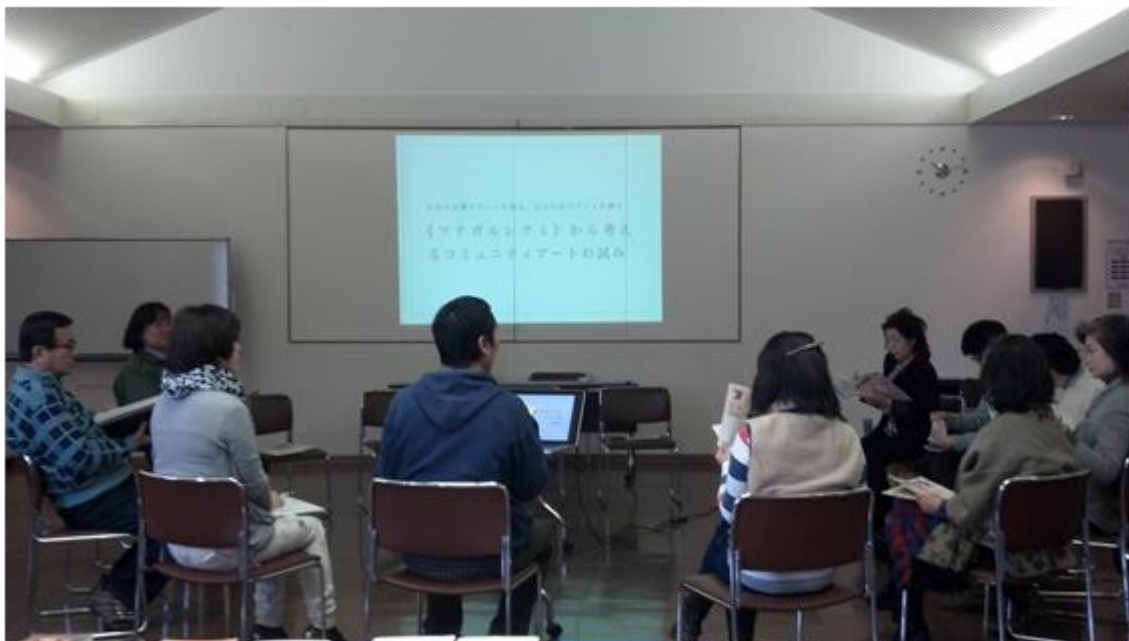
講座初日には参加者が多く集まりましたが、今は、これくらいの人数に落ち着きました。アートという言葉が敷居を高くしてしまったのかなとも思っていますが、アートは講座としてやりたいと思っていたので、今回出来たのは良かったです。日常の中にあるアート、いろんな視点、気づき。これらをみなさんが発見されたことは私にとって喜びです。アートは課題の発見、問題提起という作業だと思います。日常の中で、今回学んだことを広げ、表現していくことを考えて頂けたら幸いです。1人では難しくても、グループになってやってみると、出来ることもあります。そんな広がりがあったらなと期待しています。

杉並区社会教育センター：スタッフ3

参加者として楽しい講座でした。見える講座が多かったのですが、見えない講座だったと思います。どういうものが自分にくるのかなと見えない感動や気づきのことです。学んだというよりは刺激、感動になったと思います。映像の持つ力、嘘が真になる力。それらは意識しなきゃなと考えました。とても刺激的な講座です。学びを日常で表現できたらなとも思いますし、講座がみなさんの日常に活きたら幸いです。

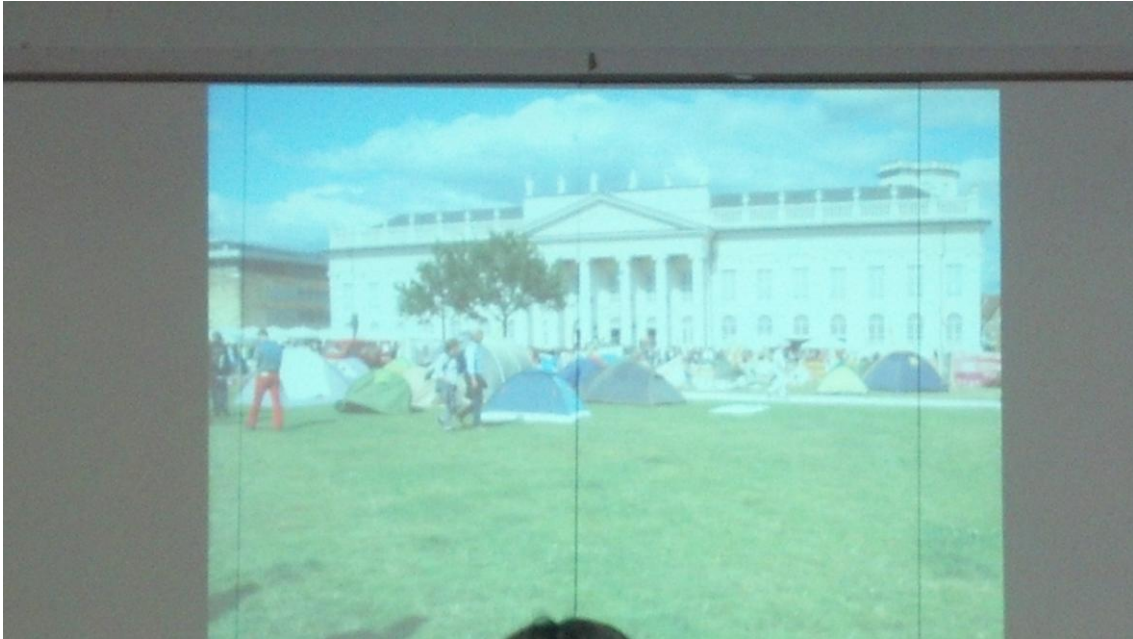
学習支援者：坂田

みなさんの意見をこうして、聞くのは初めてですね。すごく新鮮です。ここからは日沼さんにバトンタッチして話して頂けたらと思います。



学習支援者：日沼

感慨深いです。今日が最後の講座になります。本講座は、みなさんにとって表現の場になったんだなと感じています。今日は、改めて、町とアートのつながりの事例を話していきたいと思います。まずは、町って、どうやって出来ていったのでしょうか。家族という最も小さな社会の単位が生まれ、集まり、そこに必要なさまざまな店ができるというように、町は人間の営みの流れの中で作られてきました。しかし、近代になると都市計画があり、中心に美術館をつくったりするなど、意図的な仕組みも発生してきました。町は長い歴史の中で生まれその時代の人たちが社会的背景の中で作ってきたものです。これから紹介するものを見て、「町とアート」の関係について、みなさんの見方が変われば良いなと思っています。こちらはドイツのカッセルという町です。5年に1回の大規模な国際美術展があり、各時代を切り取ったアートが発表されてきました。東西ドイツ国境付近にあるカッセルは、第二次世界大戦後は厳しい状況下にありましたが、現在では世界有数のアートの町となっています。敗戦国であるドイツが、国際社会に復帰するために、アートが答えになったのです。東西国境付近であるとともに、ナチスドイツによるユダヤ人収容所への輸送発着地でもあり、大戦で破壊された町。そこに、人間性の回復や町の復興を訴えるためにアートの力に目が向けられた。そんなアイデアをドイツから国家事業として発信していったのです。現在では世界中の人々が関心を寄せ、期間中は町中が多くの人が集まり、町中にアートがあふれています。



なぜ、ドイツがアートを大切にするのかというと、ヨゼフ・ボイスという一人のアーティストが関係してきます。ボイスはドイツ空軍に志願し出征。1944年にクリミア半島上空でソ連軍に撃墜されます。そのとき、遊牧民のタタール人によってそりで運ばれ、体温を下げないようにバターを身体に塗ってもらい、フェルトで包まれ、命を救われたといわれています。ボイスは生かされた自分を、どう社会にメッセージとして伝えていくかを考え続けました。そして、このドクメンタの7回目の開催時（1982年）に、敗戦で失われた場に樅木を植樹し、町を復興する《7,000本の樅の木》プロジェクトをスタートさせます。その1本目が美術館の前に植樹されました。ボイスのプロジェクトとわかるように樅の木の横には必ず玄武岩が置かれています。この1本1本が自然の街路樹であり、復興のモニュメントでもあるのです。

別の例として、パリについてお話します。パリは芸術の都として世界的に知られる町ですが、民衆が自らの自由と権利を獲得する、その象徴としてアートを貴族社会から勝ち得てきた歴史があります。が大事にされてきた理由はそこにあります。そこから始まった大衆社会を象徴する歴史は、ルーヴル宮殿を美術館にし、リゾート型ホテルと駅を美術館にしたオルセー美術館などにみることができます。また、モネの壁画があることで知られているオランジュリー美術館には、アートと癒しの関係を示す歴史があります。モネが労働で疲れたパリ市民を癒すため、自身の絵を寄贈したいという申し出があったことから美術館

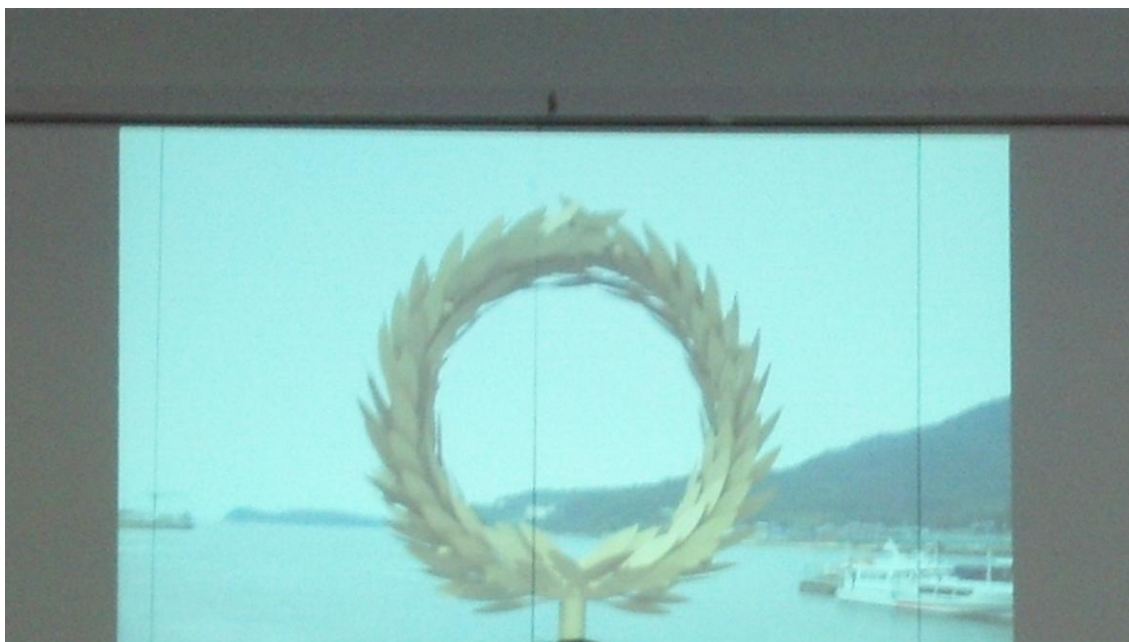
が会館しました。この出来事にも、アートは貴族社会のためではなく、民衆のためにあるということを示されているのです。

次は、「越後妻有アートトリエンナーレ〈大地の芸術祭〉」です。新潟県の過疎の村で始まったアートプロジェクトです。アーティスト、地域と人が会うことによって生まれた多くの作品が設置されています。段々畑に、米作りの様子を絵本のシルエットのような作品、イリヤ&エミリア・カバコフによる《棚田》は、米づくりと共にあった新潟の歴史、文化を現代に繋げる願いが込められています。今では国内外から多くの観光客が訪れ、現在はアートを軸とした地域活性モデルとなっています。



もうひとつ紹介したいのが、ラトビアのアーティスト、アイガルス・ビクシェの作品です。遠く離れたラトビアとこの場所をつなぐためには何が必要なのだろうと考えました。そこで、家々を廻って、欲しい家具がないか聞き、それをラトビアに帰って、家具職人に作ってもらい、贈り物としたのです。老夫婦が使う椅子や机、犬小屋など、家具をとおした文化交流ができたのです。もうひとつ、EAT & TARO による《越後妻有フード記》という食文化に注目したプロジェクトを紹介します。新潟特有のおやつである「ちまき」を作る屋台を出し、人々が互いに作り、食べ合う場を、地元のお母さんたちとともにオープンさせていました。

瀬戸内国際芸術祭では、瀬戸内の島々を周りながら、その島固有の文化に出会うプロジェクトが展開されています。この作品は、小豆島にある彫刻で、チェ・ジョンファによる《太陽の贈り物》といます。毎日見ている美しい海をいつまでも残していこうという子供たちからのメッセージを、1枚1枚の葉っぱに彫り、思いを集めた金色の月桂冠をつくりました。



京都のアーティスト、きむらとしろうじんじんさんですが、楽焼茶碗を作る屋台を町に出没させるプロジェクトを長年にわたって行なっています。お茶碗が焼けるまでの間、お抹茶を飲めるので、さまざまな交流も生まれます。さらに、屋台を出す場所も地元のボランティアの人と考え、一緒にプロジェクトを作っていきます。どこでやったら、一番面白いのかをみんな考えていく。こんな場所なら、どんな人が来て、どんな反応があるか。それを地元の人と一緒に考え、場を作るのです。



町とは、歴史があるから価値があるのではなく、すべての源は個人から生まれたものです。個人の集積が町になる。そこで、人が集まり、何かを始める。それがコミュニティであり、コミュニティをつなぐために必要な祭りも生まれていく。アートは、そうして生まれてくるものではないでしょうか。人と思いのあるところにアートはあります。地域、町の中にあるアートの役割とは、地域の魅力を発見する、共有していくこと。そして、再発見したもの、出来事を共有できること。人々の共同の仕事が発生すること。もしも、これからみなさんが、町の中で活動をしていくときには、そのことを思いとして、大切にしていきたいと思います。